

[51] キリアン『ドリームタイム』

～瞑想的な^{せいひつ}静謐、そして日本バレエの特質～

2000年6月9日 東京新聞 夕刊

音楽好きの人には、武満徹の音楽でダンスを踊るといふのはちょっと想像しにくいのではないだろうか。まずは単純な意味での拍子がないし、ダンスの登場とかテクニクの見せ場とかフィナーレとか、そういった身体表現を思わせるものが、ほとんどないからだ。

しかし実は意外に武満の音楽は舞踊作品によく用いられるのである。その理由はといえば、彼の音楽が現代人の心に強く訴えるものを持っているということ、それをおいて他にはない。心に響くものを手がかりに自分の表現を打ち出そうとすることは、舞踊にとっても、ごく自然な創作方法なのだ。

とはいえ、これまで武満の音楽が必然的に振付に関わっていると感じられた舞踊作品は見たことがない。有名な『ノヴェンバー・ステップス』など、またかと言うほど頻繁にダンスに使われるが、音楽は言わば漠然とした背景にすぎず、それがかもしれない。有名なきがらも、振付が勝手に自分のことばを語っているというだけのこと。似たようなムードであれば、他の音楽だって大差ないようなものである。

ダンス音楽なんて大方そんなものだろうと舞踊に関心の薄い人は思うかもしれない。しかし真に優れた振付は、音楽が内包している細かい特徴を決してないがしろにしない。そして本質的なレベ

[51] キリアン『ドリームタイム』

～瞑想的な^{せいひつ}静謐、そして日本バレエの特質～

2000年6月9日 東京新聞 夕刊

ルで音楽と結びついている舞踊作品だけが、繰り返して見るほどに興味が深まって、新しい発見がある。だからこそその時の試練に耐えて、古典となって残っていくのである。

この5月に東京バレエ団が上演したキリアン振付の『ドリームタイム』は、NDT（ネザーランド・ダンス・シアター）の委嘱で武満が作曲した作品（一九八三年、同バレエ団世界初演）で、何よりも振付と音楽との深く緊密なコレスポンドが見事である。音楽によって動きが生み出されているのか、あるいは身体が音楽を紡ぎ出しているのか、観ているのか聴いているのか、それすら判然としないなかで、耳には届いてこない深層の音を身体の細やかな戦慄が伝えてくれる。かと思えば別の瞬間には、まるで墨絵のなかの人物のよう^うに色を失い凝固したダンサーの、その内なるざわめきを音楽が語る時もある。

音と動きは分ちがたく一体だが、しかし歩調を合わせているわけではまったくなくて、それぞれがそれぞれであって、一つの全体に溶け込んでいるのである。

舞台の上に側面を見せて立つダンサーたち。静止した画像のようなその姿が微かに前に傾き、それが流れるような動きに連なっていく。体が波打ちながら滑り、小刻みに走って、途中でふっと止まってまた動かぬ絵になる。すべらかで鋭い動き

[51] キリアン『ドリームタイム』

～瞑想的な^{せいひつ}静謐、そして日本バレエの特質～

2000年6月9日 東京新聞 夕刊

は、まるで肉体の持つ重さや硬さとは無縁のよう。不可思議な形で絡み合った体が、わけもなく解かれて、いともスムーズに漂い、流れ、また静かに粘って虚無へと収斂する。深い息づかいに似たその流れは夢そのもの、武満の音楽そのものだ。

この作品を踊るダンサーに要求されるのは、極度に繊細な神経とそれに対応するリズム感。あくまで細やかな動きと同時に、無限を思わせる緩やかさ、それを粘って耐える強靱さだ。三人のパレリーナ（斎藤友佳理、井脇幸江、吉岡美佳）と二人のダンサー（本村和夫、首藤康之）は、驚くべき技術水準でそれを消化していた。

だが、この『ドリームタイム』で私が最も魅力を感じたのは、全体にみなぎる日本的な質感である。瞑想的な^{せいひつ}静謐とでも呼びたいその境地は、やはり日本独特のものではないだろうか。そしてそのようなものを体現するのに日本のバレエは世界のどの国のバレエにもない、ある固有の資質を保持しているように思うのである。そのような日本的な感性は今、バレエの領域においても、世界的に高く評価されている。『ドリームタイム』はチェコ出身のキリアンが振り付け、オランダのNDTによって初演されたバレエだが、いつの日か日本バレエの傑作と呼ばれる日が来るのではないか。それもあながち夢ではないと私は思っている。

[51] キリアン『ドリームタイム』

～瞑想的な^{せいひつ}静謐、そして日本バレエの特質～

2000年6月9日 東京新聞 夕刊